



Title	マルクス『テクノロジー史抜粋ノート』を調査して
Author(s)	吉田, 文和
Citation	経済學研究, 35(2), 173-182
Issue Date	1985-09
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/31696
Type	bulletin (article)
File Information	35(2)_P173-182.pdf



[Instructions for use](#)

〈資料〉

マルクス『テヒノロジー史抜粋ノート』 を調査して

吉田文和

はじめに

かつて筆者は、「マルクス機械論形成史」研究の一環として、ハンスペーター・ミュラーの「解説書」¹⁾をもとに、マルクス『テヒノロジー史抜粋ノート』²⁾を紹介・検討したところがあった³⁾。しかしながらミュラーの「解説書」は、著者も付言しておいたように、資料所蔵先の社会史国際研究所 (Internationaal Instituut voor Sociale Geschiedenis, Amsterdam, 以下 I I S G とよぶ) の許可をえずに公刊されたという問題⁴⁾のみならず、「解説」そのものに不正確なところや、「解説」表示法が一貫していないところがあった⁵⁾。

- 1) Karl Marx, *Die technologisch-historischen Exzerpte*. Historisch-kritische Ausgabe. Transkribiert und herausgegeben von Hans-Peter Müller, Ullstein, 1982.
- 2) 筆者が『テヒノロジー史抜粋ノート』と呼ぶのは、マルクスの1863年1月28日付、エンゲルスあて手紙の表現 („die technologisch-historischen Exzerpte“) による。Marx Engels Werke. Bd. 30. S. 321. 『マルクス・エンゲルス全集』第30巻, 1972年, 258ページ参照。以下 MEW. Bd. 30. S. 321. 訳 258ページというように略記する。
- 3) 拙稿「J. H. M. ボッペ『テヒノロジーの歴史』と『資本論』」, 北海道大学『経済学研究』第33巻第1号, 1983年。
- 4) *International Review of Social History*. Vol. XXVII. 1982. Part I, False Alarm.
- 5) M. Müller, Kritik und Bibliographie, *Beiträge zur Geschichte der Arbeiterbewegung*.

そこで、さきの「解説書」を紹介・検討した著者の責任において、この度 I I S G で、直接オリジナル資料にもとづいた調査を行なう機会をもったので、その一部をここに報告しておきたい。

I. ノートの形状

当該のマルクス『テヒノロジー史抜粋ノート』は、1851年に作成されたマルクスのロンドン時代における一連の抜粋ノートの1冊であって、現在 I I S G にそのオリジナルが保存されている。I I S G の「マルクス・エンゲルス遺稿」⁶⁾の新目録においては、「B-51」と分類されている。

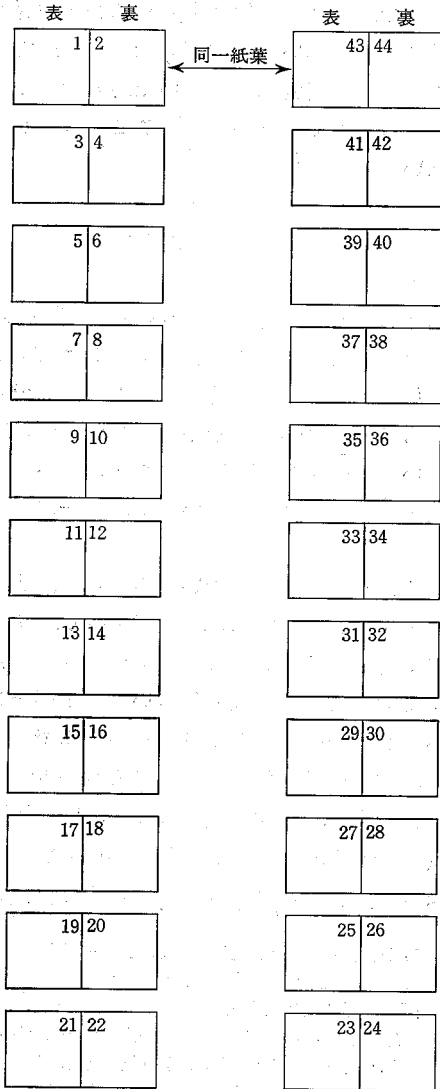
まずノートの形状についてのべれば、大きさは、1ページたて227×よこ187mmで、全体11の二つ折り用紙 (Bogen) の1ページから44ページまでによって構成されている。1ページと2ページが表ページと裏ページの関係で、その関係が43ページと44ページにまでつづいている。表表紙 (Umschlagseite. 1. 2) と裏表紙 (Umschlagseite. 3. 4) はついていない。1ページ, 3ページなどの奇数ページには右は

1983. Heft 2. S. 297~S. 300. M. Müller und J. Jungnickel, Annotationen zu neuerer Marx-Engels-Literatur aus kapitalistischen Ländern, *Beiträge zur Marx-Engels-Forschung*. Heft 13. 1982. S. 116~S. 120.
- 6) *Inventar des Marx-Engels-Nachlasses*, 1. Band Marx. S. 42.

しの上に3) というようにマルクスによるページづけがあらかじめなされており、同様に2ページ、4ページなどの偶数ページには左はしうえにページづけが記入されている。

1ページは、ページ上部に鉛筆で Heft XVII と書かれ、その右下に同じく鉛筆で「B-56」と記入されている。おそらく Heft XVII はその筆跡からしてマルクスの筆になるものである

(図一) マルクス『テクノロジー史抜粋ノート』



注) 22ページと23ページが中心のみひらき

う。「B-56」は I I S G の旧目録の分類である。1ページは左はしにたて状のしみがあり、これは1ページの裏ページにあたる2ページにインクのこぼれた跡があるためである。1ページにはこの他に多くのしみとすりきれた跡があり、ページの右はしには欠けた部分がある。また一番裏にあたる43ページと44ページはとじ目が半分程度欠けている。そして1ページと44ページとは全体が褐色になっている。これらのことが生じたのは、さきにも述べたように、このノートに、表表紙と裏表紙がつけられていなかったためであると考えられる。もちろんその他のページにも多くのしみが散見される。

この他のページの特徴についてのべれば、40ページの上部約40%がユア『技術辞典』からの蒸気機関の説明図となっている。また41ページと42ページ（それぞれ表ページと裏ページの関係）は、下のとじ目が一部欠けている。マルクスの筆記法は、39ページ以降は、行間が比較的多くとられているけれども、全体として細かいペン字で稠密な記入となっている。

II. ノートの番号づけ

当該ノートは、I I S G の旧目録にあつては「B-56」と分類され（ミュラーはこの分類にしたがっている）、新目録では「B-51」に分類されている。従来 V. アドラツキーらは、旧版『経済学批判要綱』の文献注において、マルクスのロンドン時代の一連の抜粋ノートとの関係でこのノートの番号づけを XV とみなしてきた⁷⁾。

これにたいして M. リュベールらは、ノートに記入された番号をもとにノートを XVII と理

7) Karl Marx, *Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie (Rohentwurf)* 1857-1858. Moskau. 1939 [Dietz Verlag. Berlin. 1953] Literaturverzeichnis. S. 1066. K. Fricke/W. Jahn, „Marx' Londoner Exzerptheft von 1850 bis 1853“, in *Arbeitsblätter zur Marx-Engels-Forschung*, Heft 2, 1976, S. 64. 76.

解し、ミュラーもこれにしたがっている⁸⁾。

さきにも述べたごとく、このノートの表表紙にあたる第1ページには、おそらくマルクスの筆になるとみられる Heft XVII という鉛筆書きが見出される。これにたいして、同じロンドン時代のノート「B-60」(新目録。旧目録では「B-48」)においても、鉛筆で Heft XVII と記入されている。ノート「B-60」には、その10ページに Newman. S. (Contin. v. Heft XVI. p. 43) と書かれ、67ページ(最終ページ)で K. D. Hüllmann について、Schluß sieh Heft XVIII と記されている。これらのことは、「B-60」が本来、Heft XVI と Heft XVIII のあいだの Heft XVII であったということを示唆している。したがってここから「B-51」にしるされた Heft XVII を、本来 Heft XV とすべきものの誤記としてみなすことも可能である⁹⁾。今後なお検討が必要な問題である。

III. ノートの作成時期

当該ノートの作成時期については、マルクスの、1851年10月13日付のエンゲルスあて手紙に

- 8) M. Rubel, "Les cahiers de lecture de Karl Marx," *International Review of Social History*, Vol. 2. 1957. p. 412. F. Neubauer, *Marx-Engels Bibliographie*, Harald Boldt Verlag, Boppard, 1979. S. 82.
- 9) 以上は、大野節夫氏(同志社大学)の御教示による。記して謝意を表したい。SPD(ドイツ社会民主党)時代の *Inventar des Marx-Engels-Archivs* には Konvol. Nr.22 として、「Zu: Gesch. der Technologie: Poppe: Gesch. der Technologie. 1850」と記されている。Paul Mayer, „Die Geschichte des sozialdemokratischen Parteiarchivs und das Schicksal des Marx-Engels-Nachlasses“ *Archiv für Sozialgeschichte*, VI./VIII. Band. 1966/67. S. 170. なお新 MEGA 編集者は、K. D. Hüllmann 抜粋ノートを Heft XVII とみなしている。F. Schellhardt, „Marx' Exzerpte über K. D. Hüllmanns Werke im Heft XVII der "Londoner Hefte 1850-1853"“, *Arbeitsblätter zur Marx-Engels-Forschung*. Heft 16. 1983.

において、「図書館で、主にテクノロジーとその歴史、農学について勉強している」¹⁰⁾ としるされていることを根拠にして、アドラツキー¹¹⁾、そしてリュベール¹²⁾、ミュラー¹³⁾は、ほぼ 1851年の9月から10月にかけてと推定し、I I S G の新目録も1851年10年ごろとしている¹⁴⁾。

筆者はこれについてとりたてて異論はないが、問題はむしろマルクスがこの時期(1851年9月~10月ごろ)に、なぜテクノロジー関係のノートを作成したかにあるようにおもわれる。これについて新 MEGA 編集にあたり一連の『ロンドン抜粋ノート』を担当されているハレ大学の W. ヤーン教授は、筆者との討論においてつぎのようにのべられた。すなわちマルクスがリカード¹⁵⁾学説の検討過程で、利潤率の傾向的低下の問題と地代の問題に関心をいただき、利潤率の傾向的低下に反対に作用する要因として、テクノロジーの問題が重要であると考え、また地代の問題もこの時期、ジョーンズやリビヒなどを検討して自然科学やテクノロジーの進歩とのかかわりで研究する視点をもつにいたった、と。

筆者はこれについて傾聴すべき内容を含んでいると考えるが、なおさきのマルクスのエンゲルスあて手紙(1851年10月13日付)において、マルクスが当時(1851年5月から10月まで)開催されていた産業博覧会の内容について強い印象をうけたとのべている点をあわせて重視したい¹⁵⁾。というのは、マルクスがこの産業博覧会

10) MEW. Bd. 27. S. 359. 訳307ページ。

11) *Karl Marx, Chronik seines Lebens in Einzeldaten*, zusammengestellt vom Marx-Engels-Lenin-Institut, Moskau, 1934. S. 113. MEW. Bd. 8. S. 671. 訳25ページ。

12) M. Rubel, *op. cit.*, p. 392 ff.

13) Hans-Peter Müller, *op. cit.*, S. [15]. ミュラーは、『抜粋ノート』が異なる別々の時点に書かれたことをも推論しているが(S. [13], [14]), 筆者にはその根拠が不明確であるようにみえる。

14) *Inventar des Marx-Engels-Nachlasses*, 1. Band Marx. S. 42.

15) MEW. Bd. 27. S. 359. 訳307~308ページ。

の内容をもとにした『諸国民の産業』を当該のノートとともに、『1861-1863年草稿』そして『資本論』執筆のさい使用しているからである¹⁶⁾。言葉をかえれば、1851年当時開催されていた産業博覧会がマルクスの『テヒノロジー史抜粋ノート』作成の契機となり、またこの産業博覧会の内容をもとにした『諸国民の産業』が『テヒノロジー史抜粋ノート』とあわせて、『資本論』第1巻第13章「機械と大工業」の直接の資料上の基礎となっている点を重要と考えるものである。

IV. ノートの構成

マルクス『テヒノロジー史抜粋ノート』(B-51)の内容構成はつぎのとおりである(ノートにおける下線をひかれた表題をイタリクスで示す)。

- *Poppe (J. H. M.), Die Mechanik des 18^{ten} Jahrhunderts und der ersten Jahre des 19^{ten}. Pyrmont. 1807.* (『18世紀と19世紀はじめの機械学〔力学〕』) 1ページ2行。
- *Poppe (J. H. M.), Lehrbuch der allgemeinen Technologie. Frankfurt a/M. 1809.* (『一般テヒノロジー教程』) 1ページの3行目から3ページの3分の2まで、合計2ページ4分の3。
- *Poppe, Die Physik vorzüglich in Anwendung auf Künste, Manufakturen und andere nützliche Gewerbe. Tübingen. 1830.* (『工芸, マニュファクチュア, その他有用産業に応用された物理学』) 3ページの3分の2から10ページの3分の1まで、合計6ページ3分の2。
- *Poppe (J. H. M.) Geschichte der Mathematik seit der ältesten bis auf die neueste Zeit. Tübingen, 1828.* (『最古代から最近までの数学史』) 10ページの3分の1か

16) 拙稿『「諸国民の産業」と『資本論』』, 北海道大学

- ら11ページの3分の1まで、合計1ページ。
- *Poppe (J. H. M.) Geschichte der Technologie. 3 Bde. Göttingen. 1807-11.* (『テヒノロジーの歴史』) 11ページの3分の1から37ページの3分の1まで、合計26ページ。
- *Dr. Andrew Ure, Technisches Wörterbuch bearbeitet von K. Karmarsch und Dr. F. Heeren. Prag. 1843-44. (3 Vols).* (『技術辞典』) 37ページの3分の1から44ページ2行目まで、合計8ページ弱。
- *Beckmann, Beyträge zur Geschichte der Erfindungen. Göttingen. 1780-1805. 5 Bände.* (『発明史論集』) 44ページの3分の1, 合計3分の1ページ¹⁷⁾。

『テヒノロジー史抜粋ノート』の中心をなすポッペ『テヒノロジーの歴史』からは、以下の部分からそれぞれの行数(ノートの行数)が抜粋されている。

- 第1巻, 序説54行, 食糧・ミューレ130行, 衣服装飾20行。
- 第2巻, 服装22行, 住居24行, 時計183行, 製紙・製本78行, 光学・理学・音楽用具47行, その他29行, 金属加工59行, 食・酒27行, 衣服装飾品22行, 武器・鑄貨82行。
- 第3巻, ランプ・ランタン他42行, タバコ27行, 印刷・製材他44行, 製塩・製糖36行, なめし皮他35行, 染料10行, ビール・酢・火酒35行, 陶器13行, ガラス製品11行, 染色32行¹⁸⁾。

『経済学研究』第32巻第3号, 1982年。

- 17) ミューラーの解説における内容構成のページ数表示(S. LXXVII)は正確ではない。
- 18) ミューラーの解説における行数表示(S. LXIII)は正確ではない。なお、1854-56年に作成されたとみられるマルクスのノート「B-75」(I I S G 新目録)の19ページには、ユアとポッペの抜粋からのさらなる抜粋が行なわれている(S. 19. Z. 32-37)。ミューラーの「解説書」(S. 169)では、旧目録にしたがって、「B-79」の25ページ(I I S G のページづけ)からの抜粋としている。

V. ミュラー「解説書」の問題点

ミュラーの「解説書」は、独自の序文と解説を含んでおり、これにたいして筆者なりの見解をもつものであるが、ここでは純粋に解説上の問題点に限定して、かつて同書を引用・利用したものの責任において筆者の調査しえたかぎりにおいて、その不正確な部分をただしておきたい。

問題点は、大きくわけて、①マルクス『テヒノロギー史抜粋ノート』のオリジナルに存在する部分を脱落させている個所、②マルクスのオリジナルに存在する下線強調部を脱落させている個所、③マルクスの筆記体に存在する大文字・小文字の区別を不明確にしている個所、④マルクスの抜粋対象となっているポッペなどの原典ページ数を誤って表示している個所、⑤解説表示法の問題、などに整理することができる。

①マルクス『抜粋ノート』の一部を脱落させている個所

マルクス『テヒノロギー史抜粋ノート』31ページ22行目には、ポッペ『テヒノロギーの歴史』第3巻22-23ページからの抜粋がつぎのように行なわれている。

„gab es schon im fernsten Alterthume. Alexander der Große ersten sie in Griechenland ein, Julius Cäser brachte sie bey den Römern in Gebrauch. Auch“

しかしミュラーの「解説書」は、以下に示す個所においてこの部分を1行全体脱落させている¹⁹⁾。

„Ebenso m. d. *Laternen*. [] *Blendlaternen* hatten d. Alten“

こうした脱落は細かいものでは他にいくつかあるが、内容上重要な論点にかかわる個所において脱落がみられる。たとえば、『テヒノロギー史抜粋ノート』13ページ49行目に、ポッペ『テヒノロギーの歴史』第1巻163ページからの抜粋がつぎのように行なわれている。

„kein lebendiges Gefälle hatte, oder keine senkrechte Höhe von der schiefen Fläche an bis zur Horizontalfläche gerechnet.“

ここに二重下線部の an は、ポッペの原文 (Bd. I. S. 163), そしてマルクスの『抜粋ノート』(S. 13. Z. 49) にも正しく記入されているけれども、ミュラーの「解説書」においては、これ (an) が脱落している²⁰⁾。のちに改めてふれることにしたい。

②マルクスの下線強調部を脱落させている個所

マルクスが抜粋にあたり下線をつけて強調した個所は多数存在している (そのなかには、原典でゴシックとなっていた個所もある)。ミュラーの「解説書」においては、マルクスの下線強調部はゴシックの表示となっている。しかしマルクスの下線強調部の多数を脱落させ、あるいは下線がつけられていないにもかかわらずゴシック表示となっている個所がある。

マルクスの ノートペー ジ数, 行目	ミュラー「解 読書」ペー ジ数, 行目	下線強調部文字
S. 1. Z. 25	S. 4. Z. 37-38	die wie eine Schere an
S. 3. Z. 34	S. 14. Z. 9-10	Seilräder u. Rollen
S. 7. Z. 20	S. 31. Z. 6	Glas=90
S. 16. Z. 20	S. 67. Z. 21	Appretiren
S. 17. Z. 3	S. 70. Z. 18	Mulgarn
S. 18. Z. 1	S. 74. Z. 32	Neapel
S. 18. Z. 30	S. 77. Z. 11	Maschen
S. 19. Z. 20	S. 80. Z. 14-15	Fraunzimmerleibchen
S. 24. Z. 7	S. 98. Z. 4	Cardanus

19) Hans-Peter Müller, *op. cit.*, S. 126. Z. 4.

20) Hans-Peter Müller, *op. cit.*, S. 57. Z. 1.

S. 25. Z. 45	S. 104. Z. 14	Brillen
S. 27. Z. 22	S. 109. Z. 37	schlÄmmen
S. 28. Z. 36	S. 115. Z. 2	Hölzern SiedegefÄsse
S. 29. Z. 34	S. 118. Z. 37	Reutergeschoß
S. 30. Z. 31	S. 122. Z. 29	Messingener Saitendrath
S. 30. Z. 47	S. 124. Z. 2	Hammer
S. 32. Z. 20	S. 129. Z. 23	Innocenz XII
S. 33. Z. 12	S. 133. Z. 9	eigentlichen
S. 33. Z. 32	S. 134. Z. 35	Soolensalz
S. 34. Z. 5	S. 136. Z. 33	Zuckers
S. 34. Z. 11	S. 137. Z. 16	Zukererde
S. 37. Z. 19	S. 149. Z. 3	Schlagmaschine
S. 39. Z. 27	S. 155. Z. 15	Savery

これとは逆に、マルクスにあって下線強調部となっていないにもかかわらず、ミュラーの「解説書」ではゴシック表示としているところがある。

マルクスの ノートペー ジ数, 行目	ミュラー「解 読書」ペー ジ数, 行目	下線部強調文字
S. 10. Z. 18	S. 44. Z. 9	cultivirt
S. 10. Z. 21	S. 44. Z. 21	Accentzeichen
S. 18. Z. 37	S. 77. Z. 31	1527
S. 27. Z. 25	S. 110. Z. 9	1579
S. 31. Z. 11	S. 125. Z. 10	Argand
S. 33. Z. 20	S. 133. Z. 35	Joh. Ad.

③大文字と小文字の未区別箇所

ミュラーにあって、誤りとはいえないが不正確な解説部分として、マルクスの筆記における大文字と小文字の区別がつけられずに表示されているところがある。たとえば『抜粋ノート』1ページにおけるポッペの原典表題は、正しくはつぎのようにになっている(原文の短縮形で示す)。

Poppe (J. H. M.) Die Mechanik des 18^t
Jhdts u. d. ersten Jahre d. 19^{ten}, Pyrmont.
1807.

ところがミュラーの「解説書」においては以

下のようになっている²¹⁾。

POPPE (J. H. M.) DIE MECHANIK DES 18^t JHDTS U. D. ERSTEN JAHRE D. 19^{ten}, PYRMONT. 1807.

同様の問題は、『抜粋ノート』11ページ15行目から17行目²²⁾、同44ページ3行目²³⁾に見出される。

④ポッペ原典ページの誤記箇所

ミュラーの「解説書」は、マルクスが抜粋対象としたポッペなどの原典ページ数をあわせて示している(これは、マルクスの『抜粋ノート』自体には存在しない)。しかしながらそのページ数にも誤りがみられる。

マルクスの ノートペー ジ数, 行目	ミュラー「解 読書」ペー ジ数, 行目	ポッペの原典ページ
S. 1. Z. 9	S. 3. Z. 24	10→12
S. 14. Z. 1	S. 57. Z. 10	166
S. 14. Z. 42	S. 60. Z. 20	214
S. 21. Z. 40	S. 88. Z. 17	84 / 85

⑤解説表示法の問題

この他の問題点として、ミュラーの解説表示法には一貫しない点があることを指摘しておかなければならない。マルクスの『抜粋ノート』の筆記法の多くは、彼独自の短縮形で表記されている。ミュラーの「解説書」の場合には、このマルクスの短縮形をそのままのかたちで示し、注記において完全な形になおすという原則をとっているが、この原則は必ずしも一貫して適用されていない。ある場合には、注記ではなく本文において完全な形になおされているところもある(たとえば、d., des, der, denなど)。

以上、筆者が確認しえたかぎりにおいて、ミ

21) Hans-Peter Müller, *op. cit.*, S. 3. Z. 1-2.

22) Hans-Peter Müller, *op. cit.*, S. 47. Z. 21-25.

23) Hans-Peter Müller, *op. cit.*, S. 166. Z. 4-6.

ュラーの「解説書」の問題点を5点にわたりのべてみた。

VI. 『テヒノロジー史抜粋ノート』の利用法

筆者が本来、マルクス『テヒノロジー史抜粋ノート』に関心をもつにいたったのは、このノートが『1861-1863年草稿』ならびに『資本論』に広範囲に利用されているからであった。

現在、『1861-1863年草稿』中の「γ. 機械。自然諸力と科学の応用」部分の執筆時期につき、筆者は新 MEGA 編集部の見解（「γ. 機械。…」冒頭の Heft V-190~V-211 は1862年3月に執筆された）とは異なり、「γ. 機械。…」冒頭部分も Heft V-211 以降と同じ時期の1863年1月ごろに執筆されたと主張している²⁴⁾。

そのさい、筆者の見解の1つの論拠となっているのは、『1861-1863年草稿』中の Heft V-192 の記述の一部がさきのマルクス『テヒノロジー史抜粋ノート』の13ページ49行目にもとづくものであり、マルクスが1863年1月28日付のエンゲルスあての手紙において、このノートを読みかえしたとのべている点であった²⁵⁾。

今回、この『抜粋ノート』のオリジナルを調査して改めて印象づけられたのは、『1861-1863年草稿』の Heft XIX-1162 以降における記述が、『抜粋ノート』の同じ見開きページにあたる、12ページから13ページにかけてにもとづいているということであり、換言すれば、Heft V-192 と Heft XIX-1162 以降の記述のもとになっている『抜粋ノート』のページが同じ見開き部分にあるということであった。このことは、「γ. 機械。…」冒頭部分が、それ以降の部分とともに「中断」なく書かれたという私見をいっそううらづけるものであるといえよう。

24) 拙稿『『剰余価値学説史』と『機械論草稿』』、『経済』1983年10月号。同「ふたたび『機械論草稿』について」、『経済』1984年5月号、参照。

25) MEW. Bd. 30. S. 320. 訳257ページ。

む す び

本稿において、筆者は直接オリジナル資料の調査にもとづいてマルクス『テヒノロジー史抜粋ノート』の書誌的特徴を紹介し、かつ筆者自身かつて紹介・利用したミュラーによる同ノートの「解説書」の問題点を指摘した。

もとより、筆者自身の解説に誤りもありえよう。今後研鑽を積みただして行きたいと念ずる次第である。同ノートは、新 MEGA 版で第Ⅳ部の第9巻か第10巻として、1990年に刊行される予定であるとのことである。今回ハレ大学でその編集担当者である H. A. ゴルクス博士と、U. ガランダー女史に直接お会いし、討論の機会をもつことができた。そして今後、資料交換と意見交換をつづけ、筆者としても新 MEGA 版編集に協力することとなった。研究の成果を新 MEGA 版編集に反映させ、かつ個別にも明らかとなった点を報告していく次第である。

〔付論〕

マルクス『バビジ・ユア抜粋ノート』について

マルクスがブリュッセル時代の1845年に作成した『バビジ・ユア抜粋ノート』についてここで簡単にのべておきたい。このノートのオリジナルは、I I S G の新目録「B-33」（旧目録「B-30」）として分類されている。筆者もかつて紹介したごとく、ライナー・ヴィンケルマンによって、その「解説書」²⁶⁾が刊行されたが、さきのマルクス『テヒノロジー史抜粋ノート』の「解説書」と同様の問題点をもっているようにおもわれる。そこで筆者のオリジナル調査に

26) Karl Marx, *Exzerpte über Arbeitsteilung, Maschinerie und Industrie*. Historisch-kritische Ausgabe. Transkribiert und herausgegeben von Rainer Winkelmann, Ullstein, 1982.

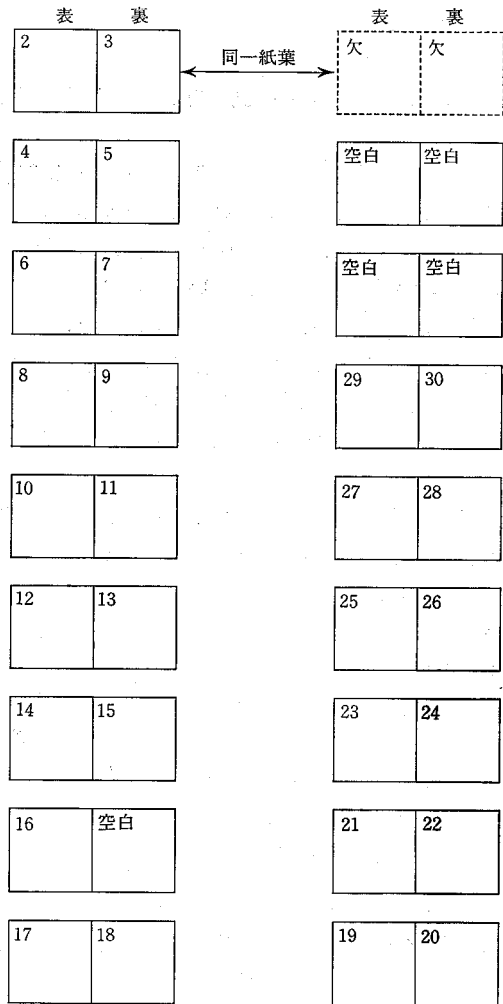
もとづいてノートの概要を紹介し、あわせてさきの「解説書」の問題点について指摘しておきたい。

当該ノートは1ページたて307×よこ197mmの大きさをもち²⁷⁾、全体で17の二つ折り用紙(Bogen)からなっている。表表紙の左上部には、2と鉛筆でページづけがなされ、左上部にジラルダン(Aug. de Girardin)の抜粋が行なわれ、ページ右側に鉛筆であとから「B-30」と書き込まれている。このページは周辺部分がかなり破損し、全体が変色している。2ページの裏は3ページで、バビジの抜粋がはじめられている。抜粋の方法は、中央から左半分と右半分にわけられ、左半分から先に抜粋が記入されている。3ページの中央上部に、3) Babbage. (1832 geschrieben sein Buch) と記入されている。それ以降10ページ(左半分のみ)までバビジからの抜粋がつづけられている。4ページと5ページが表と裏の関係で、その関係は6ページと7ページ、8ページと9ページ、10ページと11ページとつづいている。

11ページから15ページまではユアからの抜粋である。抜粋の方法は、バビジと同様である。11ページの中央上部に、4) Andrew Ure. と記入され、15ページの右半分の約3分の2まで使用されている。16ページには、ペレール(Jacob Pereire)が抜粋されているけれども、このページの裏は使用されていない。17ページと記入されているところから30ページまではロッシ(Pellegrino Rossi)が抜粋されている²⁸⁾。

当該ノートに抜粋されている Charles Babbage の原典は、*Traité sur l'économie des machines et des manufactures*; trad. de l'anglais sur la troisième édition par Ed. Biot, Paris, 1833 であり、Charles

(図-2) マルクス『バビジ・ユア抜粋ノート』



注) 18ページと19ページが中心のみひらき。

Babbage, *On the Economy of Machinery and Manufactures*, London, 1833, 3rd ed. のフランス語訳である。

また Andrew Ure の原典は、*Philosophie des manufactures ou économie industrielle de la fabrication du coton, de la laine, du lin et de la soie, avec le description des diverses machines, employées dans les ateliers anglais*, Paris, 1836であり、Andrew Ure, *The Philosophy of Manufactures*, London, 1835のフランス語訳である。

27) ヴィンケルマンは、310×201mmとしている。Ibid., S. 5.

28) ヴィンケルマンは、筆者のいうはじめの第2ページを第1ページとしてページづけを行なっている。したがって1ページずつずれることになる。

このノートの抜粋対象となったバビジとユアの原典は、ダニエルズ (Roland Daniels) が1849年にマルクスの所蔵本を整理した目録(1850年)に記載されている²⁹⁾。したがって、1845年のブリュッセル時代に作成されたバビジとユアからの『抜粋ノート』は、マルクスの所蔵本をもとに行なわれた可能性が強いと考えられる。

これに関連して、新MEGA版『1861-1863年草稿』付属資料³⁰⁾は、『1861-1863年草稿』のHeft IV, V (いわゆる「中断」以前の部分)におけるユアからの引用は、ブリュッセル時代の1845年の『抜粋ノート』(当該ノート)にもとづいて、ユア原典のパリ版ではなく、ブリュッセル版から行なわれたと解釈している。そしてこれを、「γ. 機械。…」執筆「中断」説の1つの傍証としているようである。しかしながら、さきにも述べたごとく、当該ノートの抜粋原典も、マルクスの所蔵本ともにブリュッセル版ではなく、パリ版である。この点は、I M L (マルクス・レーニン主義研究所、ベルリン)のユングニッケル研究員もみとめられたところである。したがって、さきのユア原典は『1861-1863年草稿』中の「γ. 機械。…」執筆の「中断」以前がブリュッセル版で、「中断」以降がパリ版であるとするのは、「γ. 機械。…」執筆「中断」説の1根拠としては成立しえないところとなる。

つぎにヴィンケルマンの手になる「解説書」の問題点を指摘しておきたい。これもミュラーのものとはほぼ同様に整理できよう。

29) Bestandsverzeichnis der Bibliothek von Karl Marx verfaßt von Roland Daniels (1850) in *Exlibris, Karl Marx und Friedrich Engels* (Schicksal und Verzeichnis einer Bibliothek) Dietz Verlag, 1967. S. 214-216. ただし本書はユアの原典をあやまってブリュッセル版としているが、正しくはパリ版である。この点はI M Lのユングニッケル研究員が確認されている。

30) MEGA. II. 3. Apparat. Dietz Verlag. 1982. S. 3149.

①脱落箇所、誤記箇所

マルクスの ノートペー ジ数, 行目	ヴィンケル マンのペー ジ数, 行目	内 容
S. 4. 左 Z. 44-45	S. 55. Z. 38	die Unze u. Ha u. ohne Käufer (下線 部脱落)
S. 11. 右 Z. 4	S. 74. Z. 22	p. 58 → p. 85

②下線強調部の誤記箇所

マルクスの ノートペー ジ数, 行目	ヴィンケル マンのペー ジ数, 行目	内 容
S. 3. 左 Z. 14	S. 52. Z. 2	Verkaufspreis (下線 なし)
S. 7. 左 Z. 28	S. 64. Z. 17	perfectionnemens me- caniques (下線なし)
S. 12. 左 Z. 3	S. 76. Z. 1	30,000,000 (下線あり)
S. 15. 右 Z. 33	S. 85. Z. 31	factorie (下線あり)

③文字間隔の誤記

マルクスの ノートペー ジ数, 行目	ヴィンケル マンのペー ジ数, 行目	内 容
S. 8. 左 Z. 2	S. 67. Z. 34	Natur [^] nach nicht [^] deplacirt [^] werden (^に間隔あり)

ところで当該ノートの各部分には、たて方向やななめ方向に、主に赤鉛筆がひかれたところが見出される。これはマルクスの「使用済印」であって、同じくマルクスの『引用ノート』や『1861-1863年草稿』にも数多くみられるところである。マルクスは各種のノートや草稿を他の草稿やノートに利用するさいに、「使用済印」をつけたのである。このノートの場合には、主に赤鉛筆が使用され、その他黒インクと黒鉛筆で行なわれている部分がある。赤鉛筆による「使用済印」が3ページから15ページのほとんどの部分につけられているのにたいして、黒インクの「使用済印」は、ユアからの抜粋がある

12, 14, 15ページにのみしるされている。

筆者による I M L (ベルリン) における聞きとりによれば、当該の『バビジ・ユア抜粋ノート』は、新 MEGA 版では、モスクワの

マルクス・レーニン主義研究所担当によって、第Ⅳ部の第3巻として1989年に刊行されるとのことである。それをまっけて、以上の内容を再度確認することにした。